

# ジャンル準拠指導による英語ライティング指導の高校生への効果

渡辺 英雄 (武蔵野大学教育学部教育学科)

池田 達哉 (南山高等学校・中学校女子部)

## 要約

高等学校でのライティング指導の充実は課題であり、パフォーマンステストの導入が謳われる学校英語教育の中でこれまで以上に重要である。日本の高等学校においてこれまでライティング指導は単文レベルのものが多く、どのように英語の文章を指導するかは多くの学校で課題である。本研究では選択体系機能言語学の中で発達したジャンル準拠指導が高等学校における学習者のライティングに与える影響をテキスト分析、質問紙調査、インタビュー調査により明らかにした。分析により、ジャンル準拠指導により文章構成、文法の用法の向上が見られた。また、学習者はジャンル準拠指導について自身の長期的な英語学習の目標に貢献すると考えた。このことから、ジャンル準拠指導は学習者の英語ライティング能力と英語ライティングに向かう態度を向上させることがわかった。

## 1. はじめに

ライティング指導は日本国内外の学校教育において課題として扱われることが多い。そこには複数の要素がある。主要な要素の一つとして挙げられるのはライティング指導が単文レベルに焦点を当てた伝統的な指導法に留まっていることである。これは特に日本の学校教育に見られる傾向である。例えば石神、伊東 (2008) の高等学校におけるライティング指導の授業改善の研究では、ライティング指導においては多くの高等学校では文法・訳読式の授業が行われており、英作文の問題集を学習者が取り組み、それを板書した英文を教員が訂正する指導が一般的であるとされている。もう一つのライティング指導の主要課題は理論と実践の乖離である。Grabe & Kaplan (1996) は中等教育や高等教育におけるライティング指導は研究成果とは独立して成り立っていることが多いと指摘している。具体的にはアメリカの高等教育及び高等教育の準備を行う中等教育のライティング指導ではプロセスライティングの方法が取られることが

多いがこの指導法が高等教育でのライティング活動にとってどれ程有効かという検証はあまり行われない。またライティング研究の中で、ライティング指導の理論を高等教育に応用している例は多いが、その場合ライティング指導の研究者が指導者となり効果を測定している。学校教育の多くの場面で研究の中で発達した理論を指導に活用されるためには、学校教員によって行われるライティング指導理論に基づいた指導においてどのような学習者の変化が見られるかを探求する必要がある。

上記の状況から本研究では、「ジャンル準拠指導というライティング指導の方法が学習者のライティングとライティングへの意識をどのように変えるか」を研究課題として行った。

## 2. ジャンル及びジャンル準拠指導法に関する先行研究

### (1) ジャンルとジャンル準拠指導

本研究では選択体系機能言語学 (systemic functional linguistics) で発達したジャンルの概念を用いた。選択体系機能言語学は Michael Halliday (Halliday & Matthiessen, 2014) によって考案された言語的枠組みである。この言語的枠組みの特徴は、言葉は文化的、社会的な背景により意味が作られ、解釈されると考えられていることである。またそのような文化的、社会的な背景の中で人々は言葉を選択して使用しているとされる。より具体的に言えば言語的 (textual)、概念的 (ideational)、人間関係的 (interpersonal) な要素から言語使用は選択されていると言える。Martin (1984) はジャンルとは段階があり、目的がある社会的な活動であると定義している。具体的なジャンルの種類は、Humphrey et al. (2012) が示す種類から見てとれる (図1参照)。それぞれのジャンルは目的を持ち、特定の文章構造と言語的特徴を有する。

図 1. ジャンルの種類とそれぞれの目的、文章構造、言語的特徴

ジャンル	目的	文章構造	言語的特徴
物語文 (Storytelling)	物語を伝える	導入→出来事の 列挙	具体的な登場人物、動詞の過去 形など
反応文 (Response)	読んだ作品などについ 自分の意見を伝える	背景→意見	評価する言葉、動詞の現在形な ど
手順文 (Procedure)	何かを行う手順を伝 える	目標→材料→ 手順	命令文、具体的な言葉 (50ml な ど)
振り返り文 (Chronicling)	歴史的な事柄につい て伝える	背景→出来事 の列挙→評価	具体的な登場人物、登場人物に 関する描写など
描写文 (Description)	何かに関する数値や 特徴の情報を伝える	トピックの特 定→描写	特定の動詞や形容詞を使って細 かに描写する言葉など
説明文 (Explanation)	ある事象がなぜ起こ るのか因果関係など を含めて説明する	トピックの紹 介→順を追っ ての説明(因 果関係)	因果関係を表す動詞 (英語では lead to など) など
説得文 (Exposition)	ある視点や考えが正 しいことを読み手に 説得する	背景→意見の 表明→議論→ 意見の再表明	評価する言葉、関連を表す動詞 (英語では represent など) など

このようなジャンルの種類を用いて行う指導に「ジャンル準拠指導」がある。ジャンル準拠指導では指導はサイクルであると考えられ、一つのジャンルの指導・学習が終わると次の指導につながっていくと考えられる。そして一つのサイクルは①指導背景・目標の設定、②モデル文の提示、③共同的ライティング、④自立的ライティングという4つのステップで構成されている

(Paltridge, 2001)。①指導背景・目標の設定では学習者が置かれた状況から指導を行うために適切なジャンルを設定する。②モデル文の提示では指導を行うジャンルのモデル文を提示して、文章構成や言語的特徴を学習者に示す。③共同的ライティングの段階では教員と学習者が協力してライティングを行う。各学習者に必要な活動を考えることが重要である。④自立的ライティングでは学習者が自ら設定されたライティング活動を行う。

## (2) ジャンル準拠指導法に関する先行研究

ジャンル準拠指導はこれまで多くの研究で指導効果が測定されてきた。米国などの英語が第二言語として扱われている地域では英語学習者はジャンル準拠指導により、ライティング能力を伸ばしたことが報告されている。例えば、Harman (2013) の研究では小学校の学習者はジャンル準拠指導により物語文における語彙結束性が向上した。Bunch and Willett (2013) の研究では、中学生の英語第二言語学習者が説得文のライティング能力を向上させたことがわかった。また学習者はジャンル準拠指導の中で明示的に指導された言語的特徴を使ったことがわかった。de Oliveira and Lan (2014) は物語文のライティング能力向上に関する事例研究を行った。ジャンル準拠指導により、単語・文法、文章構成の面でライティング能力が高まったとわかった。

英語を外国語として学ぶ環境でもジャンル準拠指導が英語学習者のライティング能力向上に役立つことがわかっている。Emilia and Hamied (2015) はインドネシアの大学で説得文を指導した際に学習者の説得文のライティング能力が上がり、学習者自身もその向上を認識した。同様に Wang (2013) と Yasuda (2011) の研究では、それぞれ中国と日本の大学でのジャンル準拠指導の学習者のライティング能力向上への効果が確認された。

これまでの研究によりジャンル準拠指導が学習者のライティング能力を伸ばすことは明らかになっている。ただこれまでの研究では物語文と説得文にジャンルの種類が偏っている。また学習者のライティング能力に焦点を当てた研究が多く、学習者がジャンル準拠指導をどのように捉えたか、今後の学習にどのようにつなげるかのような学習者の意識についての調査はあまりない。ジャンル準拠指導は英語ライティングの学習サイクルを促すことが特徴であるため学習者の意識についても調査が必要である。

## 3. 研究方法

本研究はジャンル準拠指導がどのように学習者の英語ライティング能力及び意識に影響するかを調べた。テキスト分析、調査紙分析、インタビュー分析を用いて分析を行った。学習者のライティングの文章構成、文法的特徴の観点からジャンル準拠指導実施前と実施後の比較分析を行った。調査紙ではジャンル準拠指導に関する意識や指導を受けてからの学習についてどのように捉えたかを調査した。インタビュー分析では半構造化インタビューを行い学習者のジャンル準拠指導に関する意識を分析した。

ジャンル準拠指導は第2回パフォーマンステスト向けにのみ行い、第1回パフォーマンステストと第2回パフォーマンステストの学習者によるライティングの比較テキスト分析を行うことにより、ジャンル準拠指導のライティング学習への効果を示す。第2回パフォーマンステストに向けてジャンル準拠指導を用いた事前指導・事後指導を各1回行った。事前指導ではモデル文の提示、文章構成の説明、「描写」のそれぞれの段階で特徴的な英語表現を具体的に示した。また学習者にはAIによる自動英文添削ツールの EasyBib (Chegg Service, 2020)を用いて単語・文法の修正を行うよう指導を行った。これはジャンル準拠指導の共同的及び自立的ライティングの段階で必要とされるフィードバックを行う手段である。事後指導では教員及び他の学習者から内容・構成面のフィードバックを受けて、学習者が自分自身のライティングを振り返る機会を提供した。第1回パフォーマンステストでは「あなたの好きな（または興味のある）スポーツについて、80語以上の英文を1段落で書きなさい。」という課題が出され、第2回パフォーマンステストでは「あなたにとって大切な地元の文化について、100語以上の英文で紹介しなさい。」という指示のもと学習者は英語ライティングを行った。

#### 4. 研究対象

研究対象は県立高等学校普通科1学年に在籍する学習者69名である。テキスト分析には17名が抽出されて、ジャンル準拠指導前に行った2022年実施第1回パフォーマンステストと第2回パフォーマンステストの英作文が比較分析された。調査紙分析は69名を対象とし、回答の内容分析が行われた。インタビュー分析は半構造化面接形式で2名の学習者を対象にして行った。

#### 5. 結果

##### (1) 英作文分析

対象者17名の2022年度実施の第1回及び第2回パフォーマンステストの英作文をジャンルの文章構成 (Humphrey et al., 2012) と文法的特徴 (Martin & White, 2005) の観点から分析した。

まず Humphrey et al. (2012) の分析的枠組みを用いて英作文がどのような段階を踏んで構成されているかを調査した。文法的特徴は人称代名詞の使用と Martin & White (2005) の評価に関わる分析的枠組みを使用した。この分析的枠組みでは、評価する言語使用を人に対する評価 (judgement)、物事に対する



評価(appreciation)、人の心情(effect)の3つの観点から分析する。

文章構成では第1回、第2回のパフォーマンステストともに全対象者がそれぞれのテストで同じ文章構成を用いた。第1回のパフォーマンステストでは「導入」、「理由」、「結論」の文章構成であった。第2回のパフォーマンステストの英作文では「特定」、「描写」、「省察」の順にライティングが構成されていた。第1回のパフォーマンステストの文章構成では「導入」と「結論」が1文で構成されていることがほとんどであった。「導入」では“My favorite sport is basketball.”のような1文が使われることがほとんどであった。また「結論」では、“For those reasons, I like basketball.”のような1文が一つの段階を作っていた。第2回パフォーマンステストの英作文では各段階が複数の文で構成されていることが多かった。「特定」では“From now on, I’ll introduce the food culture of Togo in Aichi. People in Togo love Togo vegetables.”のように2文以上を用いて構成されていることがわかった。また「省察」でも“I remember going to see it with my friends. So this culture is very important to me.”のように2文以上で構成されていることがほとんどであった。このように文章構成はどちらのパフォーマンステストでも明確に示されていた。相違点は各段階の構成方法にあった。

次に第1回パフォーマンステストの「理由」の段階と第2回パフォーマンステストの「描写」の段階における人称代名詞と評価に関する言語使用の分析結果を示す。第1、2回のパフォーマンステストで、研究対象者はどのように人称代名詞を使用したのか比較分析した。今回の分析ではI, we, youの使用回数を分析した。これらの人称代名詞を使用する場合、個人的な活動を示す時に多く使われることが多い。また普通名詞を使う場合は一般化された情報が伝えられると考えられる。第1回パフォーマンステストの英作文の「理由」の段階では平均で6.9回の人称代名詞が使用されていた。個人的な出来事や思いを示すことが多く“I feel great”、“I practiced every day”などの記述が見られた。一方、第2回パフォーマンステストの「描写」では人称代名詞の平均使用回数は1.8回であった。またそれぞれの学習者の変化を見ても、2名は人称代名詞の使用回数が同数であったがそれ以外の学習者は第2回パフォーマンステストの「描写」で大きく減少した。

次に Martin & White (2005)の評価に関わる言語使用の分析的枠組みを用いた分析結果を示す。人称代名詞の分析同様に第1回パフォーマンステストの「理由」の段階と第2回パフォーマンステストの「描写」の段階における言語

使用を比較した。第1回パフォーマンステストの「理由」では評価する単語が平均で2.4回使用されたのに対して、第2回パフォーマンステストの「描写」では平均1.1回であった。第1回パフォーマンステストの「理由」の段階では、“unforgettable”、“I’m glad”、“It is very fun”（下線は筆者追加）などの評価を表す言葉が使われていた。一方、第2回パフォーマンステストの「描写」では“people in Inazawa love the hadake festival.”や“we can enjoy “Mikoshi””（下線は筆者追加）などの評価に関する言語使用が見られた。

## （2）質問紙分析

ジャンル準拠指導の理論を取り入れた事前指導について、「十分に役に立った」、「ある程度役に立った」、「あまり役に立たなかった」、「全く役に立たなかった」の質問に回答してもらった。結果は、「十分に役に立った」が93.4%（57名）、「ある程度役に立った」が13.0%（9名）、「あまり役に立たなかった」が0%（0名）、「全く役に立たなかった」が4.3%（3名）であった。

また、回答の理由について自由記述させた。「十分に役に立った」、「ある程度役に立った」の中では、書き方が分かった、文章構成を知ることができたとうかがえるコメントが多数見られた。また、AIの使い方が分かった、文法、単語、表現などを知ることができた、モデル文が役に立ったというコメントも複数見られた。「全く役に立たなかった」という回答の生徒3名は事前指導の授業を休んでいたからという記述であった。

## （3）インタビュー分析

インタビュー調査では、事前指導、パフォーマンステストの設定課題、事後学習がどのように学習者に影響したかを明らかにする。質問項目一覧は附属資料に提示している。インタビュー調査では2名の学習者に調査を行った。事前指導については、この課題を行う上で使える単語及びフレーズ集、英作文を行う際のテンプレートにより英作文の準備を始めやすかったことがわかった。またAIによる自動英文添削機能があるEasyBib (Chegg Service, 2020)を用いた指導では学習者は書いた英文を何度も添削にかけていたことがわかった。その理由として、間違いのない、ネイティブスピーカーのような英文を書けるようになりたいという思いがあったことが挙げられる。

第2回パフォーマンステストは描写文というジャンルを設定して行われた。これに対してインタビュー対象者は、新しい英文の種類を書くことができるよ

うになる機会と捉えて、自分が持つ将来の英語学習の目標とも関連していると回答した。

第2回のパフォーマンステストへの取り組みがどのように今後の英語ライティング学習に影響するかについては、インタビュー対象者はAIによる自動英文添削、英語表現例の提示により自分自身の英語ライティングの精度が高まり、英語表現の幅が広がっていくと考えた。

## 6. 考察

上記の分析結果から高等学校の学習者に対するジャンル準拠指導の有効性を考察する。まずこれまでの日本の高等教育において英語ライティング指導は単文レベルの焦点が当てられることが多かった。本研究により、文章レベルの指導は学習者のライティング能力向上に大きく貢献することがわかった。日本の高等学校は1クラスにおける学習者数が40名程度であることが多く、各学習者にフィードバックを与えることが難しかった。しかし、本研究で行ったようにAIによる自動英文添削ツールを用いるとこのような指導環境でも文章レベルの指導は有効である。

ジャンル準拠指導の特徴である文章構成や単語、文法の使用例の明示的提示はライティング向上に大きく寄与すると考える。まずジャンル準拠指導を受けた第2回パフォーマンステストでは「特定」、「描写」、「省察」のどの段階でも複数文が用いられており、課題として設定された「描写文」が適切な文章的段階を踏んで書かれていた。これは英語ライティングを単に「トピックセンテンス」、「本文」、「結論」とだけ捉えるのではなく文章の種類により、適切な文章構成を用いる気付きへとつながったと考える。

第1回パフォーマンステストで学習者が書いた「理由」の段階と第2回パフォーマンステストで学習者が書いた「描写」の比較では人称代名詞や評価を示す言語使用は大きく異なった。これは事前指導の際にそれぞれのジャンルの文章を書く際に有用となる言語的特徴が示されていたためであろう。また、このことから教員がジャンルの視点から英語ライティング指導を行う重要性がわかる。教員が課題設定の際に、どのジャンルを指導することが適切かを学習者のニーズや英語力から考え、課題として設定したジャンルを書く際に必要な文章構成や単語・文法の特徴を説明する必要があるからである。

文章構成、人称代名詞、評価に関する言葉の使用の分析から、本研究のジャ



ジャンル準拠指導により学習者は「描写文」というジャンルの英語ライティング能力を向上させたと言える。これまで物語文や説得文でジャンル準拠指導の有用性は示されていたが本研究により描写文の指導に対する有用性も高いことがわかった。

## 7. 結論

ジャンル準拠指導は高等学校における学習者が英語ライティング能力を向上させることに寄与すると言える。学習者はジャンル準拠指導によりジャンルに適切な文章構成、単語・文法を用いて英語ライティングを行った。また事前指導において、モデル文の提示、ジャンル特有の単語及び文法使用例の提示があることにより、学習を進めやすくなっていた。

AIによる自動英文添削は学習者に肯定的に捉えられ、多くの学習者がライティング学習のために活用した。AIの活用が自律的学習を促進するための有効な手段ではないかと思われる。

## 謝辞

本論文は2022年度しあわせ研究費（研究テーマ：ジャンル理論の中等教育での英語ライティング指導・学習への応用）の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Bunch, G. C., & Willett, K. (2013). Writing to mean in middle school: Understanding how second language writers negotiate textually-rich content-area instruction. *Journal of Second Language Writing*, 22(2), 141–160.
- Chegg Service. (2020). EasyBib. <https://www.easybib.com/> (2023年3月10日アクセス) .
- de Oliveira, L. C., & Lan, S.-W. (2014). Writing science in an upper elementary classroom: A genre-based approach to teaching English language learners. *Journal of Second Language Writing*, 25, 23–39.
- Grabe, W., & Kaplan, R. B. (1996). *Theory and practice of writing: An applied linguistic perspective*. Routledge.
- Halliday, M. A., & Matthiessen, C. M. (2014). *Halliday's introduction to functional grammar*. Routledge.

- Harman, R. (2013). Literary intertextuality in genre-based pedagogies: Building lexical cohesion in fifth-grade L2 writing. *Journal of Second Language Writing*, 22(2), 125–140.
- Humphrey, S., Droga, L., & Feez, S. (2012). *Grammar and meaning*. Newtown: PETAA.
- Martin, J. R. (1984). Language, register and genre. In R. M. Bunbury, F. Christie, S. Dawkins, & Deakin University School of Education. *Open Campus*, (Eds.), *Language studies, children writing* (pp. 21–30). Waurin Ponds: Deakin University.
- Martin, J. R., & White, P. R. (2005). *The language of evaluation*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Paltridge, B. (2001). *Genre and the language learning classroom*. University of Michigan Press.
- 石神政幸, 伊東英. (2008). 英語 「ライティング」の授業改善: 岐阜県立長良高等学校の実践から. *岐阜大学カリキュラム開発研究*, 25(2), 38-45.

#### 附属資料

##### インタビュー質問項目

1. 第2回パフォーマンステストの事前指導についてどのように思いましたか。
2. AIによる自動添削ツール Easybib は使用しましたか。どのように使い、どの程度役立ちましたか。
3. パフォーマンステストの課題はしっかり取り組めば自分の英語力を高めてくれると感じましたか
4. パフォーマンステストの課題は将来における自分の英語学習の目標と合っていると思いますか。
5. 事後指導での先生からのコメントはこれからの英語学習に役立つと思いますか。
6. 事後指導で自分自身の取り組みや英作文を振り返った際、どのようなことが良くて、どのようなことに改善が必要だと思いますか。
7. 次のパフォーマンステストや英作文の課題には今回のパフォーマンステストの経験が役立つと思いますか。